

コンブモドキ *Akkesiphycus lubricum* YAMADA  
and TANAKA 知床半島に産す

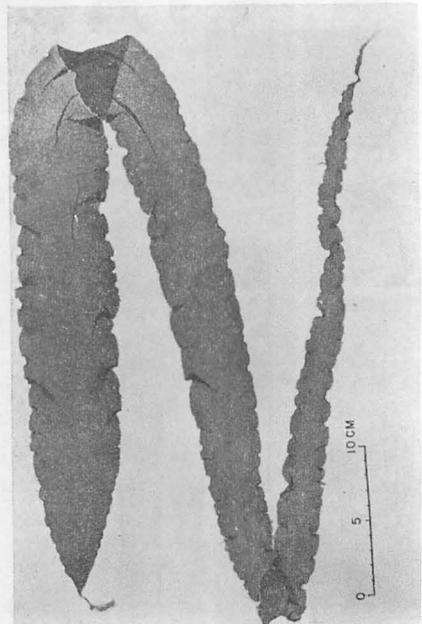
黒 木 宗 尚\*

M. KUROGI: Occurrence of *Akkesiphycus lubricum* YAMADA and  
TANAKA on the coast of Shiretoko Peninsula, Hokkaido

コンブモドキは線状披針形の葉状の褐藻で、短い茎と小さい盤状の附着器をもっている（第1図）。一見若いコンブに似ているのでこの名がある。

このコンブモドキは山田幸男先生と田中剛博士が、北海道太平洋岸東部の厚岸から1944年に初めて報告されたものである。ところがこのコンブモドキは、当教室では毎年6月下旬～7月上旬に学生実習のために厚岸で海藻の採集も行なっているが、毎年みられるものではなく、確かな記録はないが報告があったあと一、二度しか採集されていない。その一つは1951年である。特別な環境の年にしか発生しないものであろうと考えられてきた。また、厚岸以外の所からは一度も報告されていない珍しい海藻である。そして日本特産である。

このコンブモドキが厚岸で再びアイカップと大黒島に発生しているのを今年（1968）の6月下旬にみつけた。学生の臨海実習の折である。今年は5月から6月中旬まで例年に比べて水温の

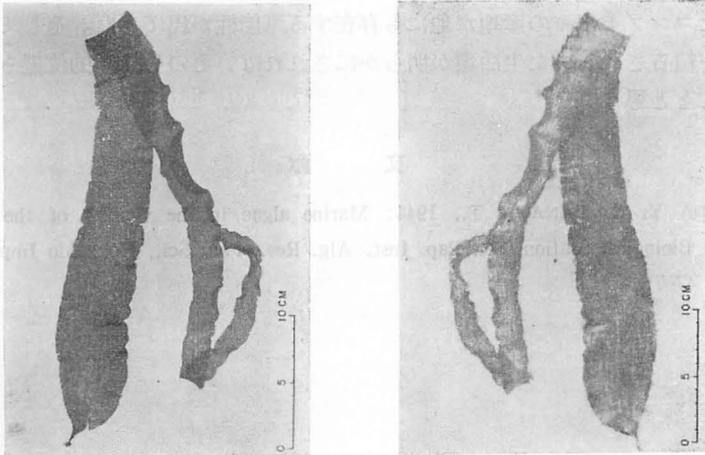


第1図 知床産のコンブモドキ

\* 北海道大学理学部植物学教室

低い年であったという。採集時の水温は $13^{\circ}\text{C}$  ぐらいであった。他の海藻にも昨年、一昨年の同時期と異なった生育を示しているものがあった。

厚岸の実習が終って間もなく7月9日から16日まで根室海峡とオホーツク海に面する知床半島の海藻調査に当教室の数人と出かけた。半島の西部のウトロと、東部の南から春刈コタン、知昭、礼文知、ガイズ岩、サシルイ、トッカリムイ、モイレウシ～ペキンの鼻、知床岬～赤岩等の羅臼地区の潮間帯、亜潮間帯の調査を行なった。これらの調査地のうち、半島の東側の北部の知床岬～赤岩とモイレウシ～ペキンの鼻で多数のコンブモドキが石、岩に着生しているのを見つけた。低潮線より少し下の所である。潜水してみたら干潮時の水深で1.5 m ぐらいまで生えていた。生産地はアイヌワカメ等の生えている外洋性の磯の近くで、しかも波のあまり強く当たらない所である。側にナガマツモ、コンブ、ババノリ、カヤモノリ、スガモ等が着生していた。厚岸の生育地と共通している。大きさ、形は山田・田中（前出）によって報告されているものと殆んど変りない。



第2図 圧を加えて作った腊葉標本(左)と、晒布に出来た藻拓(右)

コンブモドキは非常にもろくていたみやすい。採集時に普通の海藻と一緒にに入れて持ち帰ると、くずれて体の構造をよく調べる事が出来ない。山田先生がこれを初めて発見されたときは一度失敗した後、現場でアルコールに入れて持ち帰り調べたと云われている。今回は採集後すぐ現場で20～30%のホルマリンで固定するか、ビニール袋に海水を満しその中にコンブモドキを入れて宿ま

で持ち帰り処理した。いずれにしても水に入れてお互の摩擦あるいは他からの圧が加わらないようにすると良いようである。

このような海藻であるので、腊葉標本を作るのに3通りの方法をとってみた。一つは採集直後の生きたコンブモドキをさっと水洗して台紙にのせ晒布をかぶせて吸湿紙をのせ圧を加えた。2番目は同様に生きた材料を水流して台紙にのせそのまま乾燥した。3番目はホルマリン固定したものを水流して台紙にのせそのまま乾した。1番目の方法はコンブモドキが晒に密着してはがしにくく、またコンブモドキに布目がつく。布には魚拓ならぬ藻拓が出来る(第2図)。2番目の方法はそのときの湿度にもよると思うが、台紙にのせたあと藻体がふくれてブヨブヨになり、出来上がりは藻体が緑色になりまた皺もよる。3番目の方法は台紙にのせたあとも藻体がブヨブヨになることなく一番良い腊葉標本が出来た。なおコンブモドキをホルマリン海水に入れるとはじめ緑色になるが、間もなく生体とあまり変りのない黄褐色になる。腊葉標本にもこの色が保たれる。

知床半島にコンブモドキが発見されたことによって、時には幻の海藻といわれたコンブモドキの産地が他にも存在する可能性が出てきた。そしてこれの生態が精査され、また生活環が明らかにされれば、その分類学的位置も確認されることと思う。

## 文 献

YAMADA Y. & TANAKA T., 1944: Marine algae in the vicinity of the Akkesi Marine Biological Station. Sci. Pap. Inst. Alg. Res., Fac. Sci., Hokkaido Imp. Univ., 3 (1), 47-77.